

(国語科)

「自ら考え、豊かに表現する力の育成」
～ 目的や場面に応じた表現活動を通して ～

大阪市立大成小学校 井上 博之

1. 研究主題設定の理由

本校では、平成25年度より、研究主題を「自ら考え、豊かに表現する力の育成 ～目的や場面に応じた表現活動を通して～」と定め、多様な表現活動の場を工夫することにより、各教科において必要とされる基礎的・基本的な表現力の育成をめざし研究活動を積み重ねてきた。26年度からは、特に、国語科の学習を核として、「読む」、「書く」、「話す・聞く」といった多様な言語活動を展開していく中で、目的に応じて、自分の思いや考えを、豊かに表現する力を育成することをねらい実践研究を進めてきた。

今年度も引き続き、上記の研究主題で実践研究を進め、目的や相手を意識しながら、表現するための基礎的・基本的な力をさらに伸ばす言語活動のあり方を工夫していくことにした。そして、表現力をさらに高めていくため、「読む」「書く」「話す・聞く」といった言語活動に主体的に取り組むことで、話し合い活動や伝え合う活動を活性化し、より豊かに表現しようとする態度・能力を高めるための支援のあり方について研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

これまでの研究の成果としては、「音読」の指導に継続して取り組んだことで、発達段階に応じて、読書に興味・関心をもつとともに、読んだことをもとに思ったことや考えたことを、互いに伝え合う力を児童に育成することができた。また、国語科の学習の中で、「視写」を中心とした「書く」活動を多く取り入れたことで、自分の思いや考えを明確にしながら、目的意識、相手意識をもって表現することができるようになった。さらに、学習のいろいろな場で、ペアトークや少人数グループでの「話し合い」活動の場を多く設定し、主体的に友だちと思いや考えを交流することで、児童の伝え合う意欲も高まり、活発な表現活動もできるようになってきている。

3. 研究の概要

研究主題に迫るため、以下の3つの視点に沿って研究を進めていくことにした。

視点①「読む」「書く」「話す・聞く」など、多様な言語能力のを育成

- 導入の場の工夫、指導計画や活動構成の工夫、学習活動の展開を工夫することで、多様な言語能力を育成する。

視点②自分の思いや考えを相手に筋道立てて話し、的確に「伝え合う力」の育成

- 相手意識、目的意識を明確にすることで、自分の思いや考えを、相手に的確に表現する力を育成する。

視点③表現することの楽しさを知り「豊かに表現しよう」とする態度・能力の育成

- 多様な表現手段・方法を用い、3次で自分の思いや考えを互いに伝え合う場を工夫することで、より豊かに表現しようとする態度・能力を育成する

4. 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

低・中・高学年とも、教材文を視写し、視写したことによって気づいたことを交流したあと、課題に対する自分の思いや考えを書く。そして、書いたことをもとに友達との交流活動を展開した。そうすることで、児童は、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができた。

これは、ただ、単に「話合いをしましょう。」と指示し、何人かの児童の発表をたよりに話合いを展開する学習活動ではなく、個々の児童が、教材文としっかりと対峙し、そこから気づいたことを明確に言語化し、それを他の考えと交流することができたからこそ、達成された成果だと言える。

やはり、交流活動の活性化を図ろうと思えば、まず、全員が自分の考えを明確にもつこと、次に、その考えを小グループから全体へと広げるような交流の場を工夫すること、そして、交流して広がったり深まったりした考えを、自分なりにまとめ、振り返ることの出来る場を保証すること、この三点が大切なことだと言える。

(2) 今後の課題

成果とともに、課題もいくつか残った。その一つは、視写に時間がかかることである。視写に取り組む児童の筆速の違いから時間に大きな差が出るからだと考えられる。書写のように丁寧に書こうとしたり、脱字があったりしたら、大きく書きなおしたりすることも時間がかかる要因として考えられる。今後は、視写するときの約束ごとをしっかりと決め、継続的に取り組むことで、時間がかかるという課題を修正していきたいと考える。

もう一つ、グループ交流の場では、全員が活発に発言するのだが、全体交流の場では、発表する児童に限られてくることが課題として残った。児童の性格のせいでもあるが、やはり、全ての児童が、全体交流の場でも主体的に発表できるように、挙手した児童を指名するだけでなく、机間指導の際に、交流が活性化できるような考えをノートに書いている児童を捉えておき、話合いの際に、教師指名していくようにして、発言児童を広げていくようにしたい。